

Vaiśeṣika 学派における原子論

石 飛 道 子

Vaiśeṣika 学派が、因中無果の立場から現象世界の生起と止滅について形成説 (ārambhavāda) を説くことは周知である。Prāśastapāda は、世界生起についてあるいは地における pākajotpatti 論中で、原子から『二原子体等の過程に従って』 (dvyaṇukādiprakrameṇa) 結果が形成されると簡潔にその内容を示している¹⁾。注釈者達は世界生起についてこの表現を次のように説明している²⁾。

『今、結果を本質とする地等の四種に生起と止滅の過程を説く。主宰神の形成しようという欲求によって原子に運動が生ずる。それ（運動）から二つの原子が結合して二原子体が生ずる。三つの二原子体によって三原子体が（生ずる。）同様に四原子体云々の過程に従って、大なる地、大なる水、大なる火、大なる風が生ずる。……』

この形成過程は Vaiśeṣika 学派の中で定説となっているが、この他にも様々な形成説のあったことが知られている。Pbh の諸注釈の中には様々な形成過程に関する議論が見られる。又 Śaṅkara も *Brahmasūtra* の注釈中の原子原因説批判の個所で Vaiśeṣika 学派で説かれるとみられる形成説のいくつかに言及している³⁾。彼は、二原子体二個から四原子体を生ずる場合 (1) を論じ、同時に多数の原子が結果を形成する場合 (2)、多数の二原子体が結果を形成する場合 (3)、二原子体を伴う原子が結果を形成する場合 (4) も並記している。これらの説はいずれも Vaiśeṣika 学派の採るところとはならなかったが、これらの議論特に (2)～(4) については、Pbh の諸注釈に散見される。中でも (4) は ārabhyārambhakavāda という名称で呼ばれていたことが知られている⁴⁾。当時これらの説を主張する者達が実際にいたのではないかと想像されるが、その場合 Śaṅkara が主に論じた (1) が Vaiśeṣika 学派の中でどのような位置を占めていたのかについては文献に明らかでないため疑問の余地が多い。ただ後にこの説を含めたすべてが、哲学原理上の欠陥又は理論上の欠陥から否定されてしまう。(1)～(4) の理論上の欠陥の考察を通して Vaiśeṣika 学派の原子論を探りたい。

I. 形成説の検討の前段階として、原子、二原子体、三原子体の存在証明がなされる。地等の四種の原子は推論を認識根拠として成立し⁵⁾、三原子体は直接知覚

によって成立する⁶⁾。もし恒常で部分を持たない原子の存在を認めないとすれば『一切は無限の原因によって生ずるといふ点で区別がなくなるので、原因の数の多寡はありえず大小の区別はなくなってしまう、しかし実際には量の区別がある』⁷⁾から原子の存在は認められる。又一方、三原子体は裸眼で知覚出来る最小単位であるとされる⁸⁾。ところが、二原子体には成立根拠がないとしてこれらの存在を疑う者達がいる。彼らが微小体 (aṇutva) なる量の原子であってもその数が多いことによって直接大なる結果を形成するという二原子体の介在を否定する(2)の説を主張するのである。

(2) に対する批判 KN は次のように欠陥を指摘する⁹⁾。『ただ原子だけが多なる数を持つことによって大なるものを形成するとすれば、牛、つば等もこれらのみから形成されるから中間にある大小等の結果の知覚と矛盾することになってしまうから。』又『配列 (saṃsthāna) の区別を知覚しないので、これによって示されるべきつば性等をもつものも知覚されないだろう。』後の説明は、個々のつばの相違を知覚しないから共通性も知覚できないことになり、個々のつばにつば性を見ることもないだろうという内容である。NL は破壊時の欠陥を指摘する¹⁰⁾。『つばが原子の集合によって形成されるということになれば破壊されると直ちに見えなくなってしまうから。』

(2) を否定して、次に未解決の二原子体の成立根拠について討論する。

II. ここで NK は議論の方向を量ではなく数という性質へ向けている。即ち、原子何個に形成能力があるかということが問題になる。まず原子一個の場合は形成能力はない (anārambhaka)。KN では『部分の結合がありえないので非内属因がないから』という理由と、『多数なる数がないので全体が部分より大なる量とはなりえないから、なぜなら部分より全体が量の上で大であることは定則 (niyama) だから』という理由をあげる¹¹⁾。NK では『恒常で単一 (の原子) が形成能力をもつならば結果は常に生起するだろう。(他に) 必要とするものがないから。さらに、消滅しないものになってしまうであろう。消滅の原因となる依り所の滅や全体の分離がないからである。』と説明する¹²⁾。

さてそれでは原子三個の場合はどうであろうか。この三という数は三以上の大なる数を代表するものとして採り上げられたと考えられる。この場合にも生成物 (kāryadravya) の形成能力はない。なぜなら『世においては、大なる生成物の生起には自らの量より小なる量の生成物が必要であると経験されているから』である¹³⁾。そして原子は生成物ではないことは明らかである。以上の如く、原子一個

ならびに三個の場合、生成物の形成は不可能であることが示されたので、必然的に残った唯一の自然数『二』が浮びあがることになる。原子二個から生成物が生じ、それは二原子体であると成立する。Vaiśeṣika 学派はこのように帰謬法によって論証し、二原子体を論理的に要請されたものとして定めたのである。従って二原子はその性格上原子から三原子体への過渡的な存在として両者の性質をあわせて持つことになる。つまり、恒常、無常という違いはあれ微小体という量の点では原子と、生成物であるという点では三原子体と共通性を持っている。

(1) と (3) に対する批判 始めに (1) を否定する。『多数の二原子体によって形成されるということが確定しているのであって、二つ（の二原子体）によってではない。これは微小体なる量を生ずるので、実際原因としてある時（結果も）微小体となって形成は無意味であるから。』¹⁴⁾ NK は単に二原子体二個説を否定したのみで、Śaṅkara の説くように四原子体となる点には触れていない。(1) 説の詳細は不明であるが、ただ二原子体を認めつつも四原子体と述べる所から形成の基盤に常に原子を置いていたことが予想出来る。次に (3) も否定される。多数の二原子体から形成されるとは述べたが、単に多数の二原子体のみからではない。この多数ということについて規則はない。従って二原子体三個の場合は三原子体が、四個の場合は四原子体が生ずる等意のままに想定できると NK にある¹⁵⁾。この説は、先の『三個の二原子体から云々』と説く定説と若干食い違いを見せている。NK は実際の現象世界に依拠しているため様々な可能性を考慮してこのように説くが、定説の場合は理論上の統一性を重視して、大なる量としての最小数である三個のみを主張するのであろう。無用に多くを説くことは思考経済の原則 (lāghava) に反することになるからである¹⁶⁾。さてなぜ多数の二原子体が直接結果を形成することにはならないのか。『なぜならつばが破壊される時大小様々の小片を見るので、先の通り（の過程）でしか形成を想定できないからである。』¹⁷⁾ こうして (3) の説も否定された。

しかし、二原子体多数から結果が形成されるというのであれば、原子も同じく微小体であるから、これが多数あっても結果を形成するのではないかという疑いが KN に述べられている¹⁸⁾。これも又否定される。ある三原子体は二原子体から形成され、ある三原子体は原子から形成されるということはありえない。『原因の原因（である原子）が結果のそのまた結果（である三原子体）を形成することはないからである。』¹⁹⁾

III. さて原子から二原子体が、二原子体から三原子体が云々という順序で次第

に大なる結果が形成されることが証明されたが、ここで全く別の (4) 説がある。

(4) に対する批判 今までの説では、原子から最終結果までの一連の因果関係において個々の因果関係が他に作用することを認めてはいなかった。それ故結果が形成された後に、その同じ原因が再び別の結果に作用することは考えられない。しかるに (4) の ārabhyārambhakavāda では、原子が二原子体を形成した後でも原子は止滅することなく、この二原子体と別の原子とから三原子体を、さらに三原子体と又別の原子から四原子体を形成する等の過程をとると説く²⁰⁾。つまり、過程のいかなる段階でも原子の存在を必要としているわけであるから、批判の矛先もそこへ向けられる。『諸々の形体をもつものが同一場所にあるという誤りに陥いる。即ち、原子二個によって形成された (二原子体) は、二個の原子に存在するが、さらに別の (原子) を伴うこれら二個によって形成された (三原子体) はこれら二個 (の原子) ともう一つ (の原子) とに存在する』²¹⁾ ので、二原子体と三原子体が同一場所にあることになって誤りである。この誤りを避けるため、二原子体と原子によって形成されたものがただ原子にのみ存在するのだと言うならば、唯一の実体に存在している生成物は原因の分離がないから不滅ということになってしまう、又単一物 (ekadravya) と複合物 (anekadravya) とがあるという言葉に矛盾することになってしまうから²²⁾、この説は否定される。

Praśastapāda 以後の注釈者達は、(1)～(4) の異説を悉く否定する中で自派の原子論を構築していった。異説批判の検討を通して明らかになる Vaiśeṣika 学派の原子による形成説の特徴は、形成説の中に微小体でありかつ最初の結果たる二原子体を位置づけたことと、個々には独立の因果関係の長い連鎖が結果を形成するという点であろう。

1) *Praśastapādashāstra* (Pbh), G. Jha Granthamālā, Vol. 1, p. 88, pp. 127～9, p. 260.

2) *Tarkatīpikā*, Bombay Skt & Pkt S., No. LV, p. 9. 3) II-ii-11. 4) *Vyomavati* (VV), Ch. S. S., p. 230, l. 24. 5) *Nyayakandali* (NK), see Pbh, p. 79, l. 1.

6) *Kiraṇāvali* (KN), G. O. S., p. 43, ll. 7～8. 7) NK, p. 79, ll. 7～

8. 8) S. Bhaduri, *Studies in Nyāya-Vaiśeṣika Metaphysics*, Poona, 1975, p. 71.

9) p. 43, ll. 16～9. 10) *Nyayalīlavati* (NL), Ch. S. S., p. 822. 11) p. 44,

ll. 13～5. 12) p. 80, ll. 1～2. 13) NK, p. 80, ll. 3～4. 14) NK, p. 80,

ll. 6～8. 15) p. 80, ll. 8～10. 16) S. Bhaduri, pp. 75～6. 17) NK, p. 80,

ll. 11～2. 18) p. 44, ll. 19～20. 19) KN, pp. 44～5. 20) Bhaduri は

ārabhyārambhakavāda を the theory of transitive causation と説明する。p. 81.

21) VV, p. 230, pp. 29～31. 22) VV, p. 231, ll. 2～11.